

# 2008

# 市民ビデオ 研究

## TVF30年 市民ビデオフォーラム

「いま、市民ジャーナリズムがおもしろい！」

# Report

- 2008.6.14 (土) 13:30~17:30
- 横浜美術館レクチャーホール
- 主催：日本ビクター株式会社 TVF事務局  
後援：横浜市  
協力：ヨコハマEIZONE実行委員会・成安造形大学  
日本工学院専門学校・OurPlanet-TV・東京視点  
湘南映像祭・玄光社「ビデオサロン」  
市民ビデオ研究会

日本ビクター株式会社  
TVF事務局

# TVF30年記念イベント

## 「TVF市民ビデオフォーラム」を開催

### 「市民ビデオフォーラム」開催にあたって

私たち市民が生活している地域や学校、家庭などにある身近なテーマ・題材をもとに、社会へメッセージを発信する市民ジャーナリズムが活発化し、インターネットの本格普及とあいまって市民の誰もが情報発信者になれる時代となりました。今回の市民ビデオフォーラムは、ますます複雑化していくであろう社会の中で、個の視点による市民“ビデオジャーナリズム”の果たす役割・課題を探り、市民映像（ビデオ）の文化的価値を追求。30年間にわたって東京ビデオフェスティバル（TVF）に寄せられた5万本に及ぶ作品が明らかにした映像文化と市民ジャーナリズムの変遷を再確認することで、市民による情報発信が暮らしやすい社会を実現するための一助となることを目的に実施しました。

### “いま、市民ジャーナリズムがおもしろい!!” がテーマ

近年、著しく成長している市民ジャーナリズム作品には、個の視点、市民の目によるささやかな疑問や社会への提言が描かれ、それは問題解決への道しるべとなる暮らしの中のジャーナリズムです。私たちの暮らしと等身大の市民ジャーナリズム作品が発信する「情報」と「映像」の意味や価値について、ゲストによる解説やTVF30年の中から象徴的な作品を例に理解を深めました。

### 会の構成

- 第1部 特別講演 津野敬子氏（ビデオジャーナリスト/DCTV創設者）  
演題「ビデオジャーナリズムとわが人生」



- 第2部 TVF作品上映&トークフォーラム

#### （Part 1） TVF作品上映&解説

そこには市民一人ひとりの「思い」、その時代の姿がある

「TVF30年の作品が語りかける映像メッセージ」

- ・進行と解説 小林はくどう氏（TVF審査委員）

#### （Part 2） トークフォーラム

市民の視点が生んだ等身大のビデオジャーナリズム

「いま、市民ジャーナリズムがおもしろい!!」

- ・ゲストスピーカー 大林宣彦氏（映画作家）  
佐藤博昭氏（ビデオ作家、日本工学院専門学校講師）  
津野敬子氏（ビデオジャーナリスト）  
羽仁 進氏（映画監督）
- ・司会進行 小林はくどう氏（ビデオ作家、成安造形大学教授）

世界のトップで活躍する映像ジャーナリストの先駆者が語る

# 「ビデオジャーナリズムとわが人生」

ゲスト 津野 敬子 氏

(ビデオジャーナリスト/DCTV創設者)



## profile

つの けいこ 東京生まれ。ディレクター、プロデューサー。多摩美術大卒。1967年、ニューヨークへ留学。71年ジョン・アルパート氏と結婚。以後、ビデオジャーナリストとして活動を始め、米国のテレビとしては、冷戦下で初めての本格的なキューバ取材やカストロ首相の独占インタビューを行う。70年代後半のベトナム、カンボジア取材に続き、日系人の描いた「見えない市民」、ベトナム混血児「ビンの物語」、移民の街「カナル・ストリート」などの作品を発表。ニューヨークの三番街を描いた「サード・アベニュー」でエミー賞とTVFビデオ大賞を受賞。現在、DCTVプロデューサーとして後進の育成にも力を注いでいる。著書「ビデオで世界を変えよう」(草思社)。

DCTV (ダウンタウン・コミュニティ・テレビジョン・センター) 1972年、ビデオ制作と市民活動のための非営利組織として創設される。ビデオカメラ、編集機の使い方を教える無料のワークショップを20年間継続し、現在は年間を通じ、初心者向けからプロ向けまでの各種ワークショップをはじめ、機材の貸し出し、制作、配給、インターンシップ、スタジオからのポッドキャスト、サイバーバスによるロケーション撮影、作品上映会等を行う。アメリカで最大のコミュニティTVセンター。

## はじめに

東京ビデオフェスティバル30周年、おめでとうございます。

私たちDCTVはこれまで計4回、TVFでグランプリをいただきましたが、そのうちの最後の1回は、DCTVから育った若いジャーナリストが大賞を受賞しています。毎年、秋になると「今年は何を出そうかな」と考えるのが習慣になっています。私たちにとって東京ビデオフェスティバルは、過去30年においてとても大事な行事でした。世界中の多くのビデオ制作者も同じように感じていたと思います。東京ビデオフェスティバルの存在はたいへん大きく、私たちの心の支えになりました。いろいろな意味でビデオを普及させた大きな力だと思います。

ビデオ制作者を代表しまして、営利を無視してまでこのイベントを続けていらっしゃる日本ビクター、そして、審査委員の先生方のご尽力にお礼を申し上げます。

さて、ここ横浜は、50年前に私が少女時代を過ごした街です。昔はまだ路面電車の市電が走っていて、それに乗って、毎日、山の手の双葉学園に通っていました。たいへん自然に恵まれた所だったのですが、いまは全部埋め立てられてしまい、自分がどこにいるのか分からないほどです。言ってみれば浦島太郎の心境です。



私は1967年に、横浜港からアメリカに渡りました。そのときにお見送りにきてくださった家族や友人の顔が、いま会場にみえています。

この写真をご覧ください。もうすでに亡くなられた方もいて、時間が経つ早さを感じています。ちなみに最後に出た写真は、若き日の小林はくどう先生です。小林先生と私は、同じ多摩美術大学の油絵学科を卒業しまして、どういうわけか別々の国で互いにビデオを始めました。いまではビデオを通して一生のお付き合いとなっています。

## ビデオ、そしてアルパート氏との出会い

私自身は、アメリカの現代アートを勉強するためにニューヨークに渡りました。当時、まだ日本ではアートというとフランスが主流でした。



初めてアメリカの現代アートを紹介されたときはとても斬新で、いままでのアートの概念を打ち破るものでした。

アメリカで、特に興味を持ったのがコンセプチュアルアート（概念アート）という、時間・存在などをテーマにしたものでした。アートは、いままで何世紀にも渡って技術的に高度に発展してきましたが、アメリカの現代アートはそれらを打ち破るようなものだったので、まだ若く、新しい分野に憧れていた私にはとても刺激的でした。その影響でビデオ映像を撮る機械を購入したんです。

初めてビデオ機器に出会ったのは1969年。白黒のオープンリールのカメラでした。ところが、隣りに住んでいた学生のジョン・アルパートと出会ったことで、当初のアートの方向性からはずれて、ビデオを使ってドキュメンタリーを撮るという分野に移ってしまいました。

出会った当時のジョンはまだ学生で、ベトナム戦争の反戦運動をしていました。ジャーナリズムやビデオには関係のない人間だったのですが、当時の市民権運動の高まりのなかで、タクシーの運転手をしながらガリ版刷で組合運動をしていて、活動をビデオで撮影し、12分くらいのドキュメンタリーを制作して見せていたんです。当時は、まだビデオ機器は全く普及しておらず、そのリアルな映像は非常にインパクトがありました。ビデオの力、強さというものを実感し、非常に重要なコミュニケーションの手段だと認識しました。

## DCTVの活動と映像の紹介

私たちは本当にゼロからビデオ映像の制作を始めたので、どうやって機器を使っていくかもあまり分かっていなかったんです。それでも非常に小さな地域の問題、チャイナタウンやダウントウンなどの生活をどうやって良くしていくかというテ

ーマで、40～50本くらいのビデオ作品を作りました。

ある日、ニューヨーク市から人が来て、コミュニティビデオ作品を見せて欲しいと言われました。お見せしたところ、ビデオの臨場感に刺激されたようで、お金を出してあげたいので非営利団体を作りなさいと言ってくれました。そして、その日の夜にDCTVを立ち上げたのです。

私たちDCTVはビデオをとおして、ワークショップや青少年向けの番組、若いビデオメーカーを育てるプログラム、番組作成、配給、スタジオからのブロードキャスティング、上映会など、さまざまな活動をしています。それらのなかで、一番大きいのはコミュニティサービス。もうひとつは自分たちの自主制作です。

現在、DCTVでは50人以上が働いていて、高度な最新のノンリニアシステムやカメラなどを、インディペンデントでやっているプロデューサーなどに、どこよりも安い料金で貸し出したり、手法を教えたりしています。

これは当時のアメリカの4大チャンネルのひとつが制作したコミュニティビデオに関するドキュメンタリーです。当時、設立したばかりのDCTVと、その映像を紹介しています。

### ●ビデオ上映『チャイナタウン健康フェア』

この映像は1970年代に、作られた私たちのドキュメンタリーの抜粋です。このなかで私たちの初期のコミュニティビデオをいくつか紹介しています。

### ●ビデオ上映『教育委員選出を巡る騒ぎ』

次は、40年前にあったニューヨーク市の教育委員選出のドキュメンタリーです。アメリカではコミュニティが委員を選出するのですが、中国人、プエルトリカンなどが主導権を握ろうとするので、ニューヨークのダウントウンでは大変な騒ぎになります。そんななかで投票の不正



を追った作品です。

いまの紹介のなかで「DCTVはキューバの放送によって全国的に有名になった」という話がありましたが、私たちは1974年に初めてアメリカからキューバに入ったドキュメンタリーメーカーでした。キューバというのはいへん怖い国で、今の日本から見た北朝鮮のような国。謎が多いんです。

そのときにお世話になったのが日本ビクターでした。素人のグループである私たちはチャンスを与えられたけれど、白黒映像で撮ってもどこも放送してくれないかもしれません。そんなとき、日本ビクターが世界で初めて10台だけ開発したカラーのポータブルカメラをデモンストレーションしていたんです。その画質の良さを見て、私たちは「1台売ってくれ」とお願いしました。(世界初の1/2インチオープンリール完全カラー化ポータブルシステムGC-4800、PV-4800C)

それを使い、キューバで1ヶ月ほど撮影し、編集して放送。それから毎年1本ずつ、ドキュメンタリーを制作をするようになったんです。

#### ●ビデオ上映『1980年代の英国BBCの映像』

1977年に、次のスクープのチャンスがきました。それはアメリカ撤退後のベトナムがいかに復興しているかというドキュメンタリーで、ベトナム戦争終了後、アメリカから初めてベトナムに入りました。そして、その作品は、アメリカのジャーナリズムの最高の賞を受賞した作品となりました。

ここでお見せするのは、1980年代の英国BBCが撮った私たちのドキュメンタリーの一部です。ワークショップなど、DCTVの活動を紹介しています。このテープの中でも言っているように、DCTVは最初の20年間はワークショップや機材貸出等は無料でした。

私たち自身、最初は撮影したテープを編集するのにどうやっていいのかわからずに、見学にいったことがあったのです。シンプルなことを教えてもらっただけで25ドルを払ったことがありました。でも同じ頃、チャイナタウンでは、チャイナの



グループが無料でカメラの撮影方法を教えていたんです。そんな経験があったので、私たちは誰もがタダで習えるチャンスがあればいいなと考えてワークショップを無料にしていました。

しかし、政府からの援助もだんだん減ってきて、経済的にもたいへんになってきたので、わずかな金額を払ってもらうことにしました。でも、いまだにニューヨークでは一番安い金額でテクニックを教えています。

#### ●ビデオ上映『THIRD AVENUE』

続いて見ていただくのは、第3回東京ビデオフェスティバルでグランプリをいただきました『THIRD AVENUE (サード・アベニュー)』からの抜粋です。



これは、大都会ニューヨークの片隅に住む6人のポートレートドラマのようなものです。床屋さんの2人は非常に愛情にあふれた人物で、私とジョンと一緒に作った最後のドキュメンタリーとなりました。

私たちに子供が生まれて、あちこち撮影に行けなくなったこと、また、DCTVが大きくなったので、2人同時に不在にするわけにいかなくなったのが理由です。やがて、私はスローペースでドキュメンタリーを作り始めました。アメリカに住むアジア人として、女性としての観点から作品を作ってきました。



## ●ビデオ上映

## 『障害者のためのプログラム コネクトTV』

これは、障害者によるアメリカで初めてのテレビ番組で、DCTVのプログラムのひとつ障害者用のプログラムのさわりを見ていただきます。

DCTVには、10年前に障害者が働き始めました。私は、その人が来て初めて障害者の存在に気づき始めたんです。ビデオ映像のなかでも言っているように、ほとんどの人が障害者を見ないふりをします。メディアもまともに取り上げる姿勢はなかったのです。



しかし、一緒に働き始めて、彼等のことが分かってきました。考えてみれば、健常者だっていずれ年をとれば障害者になるわけです。どこかがだんだん悪くなるわけですから。これはすべての人の問題なのに、障害者ということで私たちは特別視し過ぎていたのです。

コネクトTVは、障害者による障害者のための番組です。障害者のことをよく知ってもらい、また他の障害者とコミュニケーションすることで、自分だけで孤立しているのではなく、みんなで問題を解決することができます。

でも当初は、障害者というひとつのカテゴリーのなかで一緒くたにしてしまいました。実際は身体が麻痺している人や知恵おくれの人、耳が聞こえない人など、いろいろな人がいます。そうした人を、同じグループで一緒にすると、例えば耳が不自由な人のために通訳を入れると、通訳の時間だけペースが遅れて、障害に違いがある他の障害者はイライラしたりするんですね。いろんな意味で一緒くたにするのはよくないということで、次のときには同じ障害者同士のグループに分けて、そのグループで自分たちの興味のあるテーマを撮るようにしました。

## ●ビデオ上映『青少年向けプログラム プロTV』

次にご紹介するのは、30年間DCTVが取り組んできた青少年向けのユースプログラムです。1978年に立ち上げ、初めは夏だけのプログラムでした。

8週間のプログラムが終わる頃に、生徒たちはやっと自分たちのすることが分かり、いい作品を制作するんですが、プログラム終了でバラバラになってしまうのが非常に残念でした。そこで、10年前から2年間のプログラムというのもやり始めました。

ユースプログラムでは、DCTVが各高校と提携して、200人近い生徒を教えています。DCTVが特に力を入れている2年間のプログラムは、選ばれた8人くらいの子供たちにプロのトレーニングプログラムを受けてもらっています。

そうした活動が成功するかしないかは、教えてくれる先生方の熱意と、どれくらいまで生徒の個人的な生活まで深く関わっていくかで変わってきます。

今回お見せするのは、2年前にサンダンスというアメリカでいちばん大きな映画祭で特別賞を受賞した作品です。その際に教えてくれた先生は、日本人のクワノマリさんという方で、彼女は2年間本当に親身になって生徒たちの面倒を見てこの作品を作りました。

DCTVでは、生徒たちは非常に貧しい家庭で育った、いわゆる低所得の子供たちを選ぶので、全体的には黒人、ヒスパニック系、アジア系がほとんどなんです。紹介する作品は、アメリカの銃社会、暴力をテーマにしています。

登場する黒人青年は低所得の黒人たちが住むソサエティに住んでおり、これまで彼のまわりでは8人もの知り合いが拳銃によって殺されています。アメリカにおける拳銃による暴力というのは、いま、イラクでアメリカ兵が殺されている数の約10倍（年間）にもものぼっています。でもその事実、ほとんど知られていません。

この作品は、高校生テレンス・フィッシャーによって作られましたが、自分たちの問題を撮っているの、外



から来た人には絶対に撮れない作品です。そこには素人、プロを超えた力強さがあります。見ていただければわかりますが、市民ビデオの原点のひとつだと思います。自分たちの問題を自分たちがカメラを向けて撮る。そのひとつの例になっています。

この作品はたいへん評判になりました。なぜならゲットー地区の男の子たちが作った作品で、サンダンスの特別賞をとったからです。DCTVのビルの前には、取材の中継車がズラッと並んだくらいでした。

### ●ビデオ上映『サイバーカー』

この作品ができてから、後ろに大きなモニターテレビがついたバス＝サイバーカーを買って、各コミュニティをまわって上映しました。主人公の男の子とお母さんが、コミュニティに行って銃社会を変えようというメッセージをみんなに送る活動になりました。



DCTVの初期からいまに至るまでのひとつのテーマは、「市民コミュニケーションの大切さ」です。例えば、この男の子たちにビデオカメラを持たせなかったら、自分たちの状況を変えようという意識も生まれなかったでしょう。作品の作者・高校生のテレンス・フィッシャー自身、DCTVに来たころは人前であまり喋れないような青年でした。でも、作品を作って賞をもらって自信を得、人前で堂々と意見を言えるようになりました。

現在、私たちDCTVはプロですが、ある意味では市民ビデオのままプロになった人間たちだと思います。テレビがくだらないお笑い番組であふれ、世界中で、地元で起こっている大事なことが伝えられていない。それを市民ビデオの人たちが、誰も取り上げていない自分たちの問題を、自分のビデオカメラや携帯電話のカメラで撮りアピールしていく、そして社会を良くしていく。そういう方向に向かっていくことが、私たちDCTVの義務だと考えています。

どうもありがとうございました。

司会 津野さん、どうもありがとうございました。それではここで、会場の方々からご質問を受けたいと思います。

質問A ドキュメンタリーを制作するうえで、「これは一番ゆずれない」というものは何ですか。

津野 そのときによって違うと思いますが、作品を作るときは「自分が作らなければ」と考えています。他の人でも作れるものは皆に任せておけばいい。自分にしか撮れないものがあると思う。それが原動力にもなるし、オリジナリティにもなります。結局、ゆずれないものというのは「自分の感性」や「大事だと思う」ことを伝えることだと思います。

質問B DCTVにおいて、ジャーナリストはこうあるべきだというような“教え”みないなものはあるんですか。

津野 DCTVの場合は、経済的に独立しているので、ルールからは開放されています。でも、ジャーナリストであるためには正直でなければいけないし、いろんなものからフリーで、人々に正しいメッセージを伝えるというのが根本的な姿勢だと思うんです。

質問C 最初の頃は3年間で50本以上作品を作られたということですが、問題をどうやって発見していったのですか。

津野 1970年代の初頭は、まだ誰もカメラを持っていませんでした。そういう意味ではラッキーで、特にニューヨークのダウントウンというところは、どこにカメラを向けてもストーリーが作れるような時代でした。いまは逆に、いいカメラをみんなが持っています。全員が撮れるということは、撮れる素材の幅は縮まりますよね。そういう意味では、いまビデオ作品を作るには難しい状況にある。誰も作っていない素材を見つけるというのが大きな問題になるでしょう。

質問D 現在のアメリカのテレビ、特にローカルネットワークでは、市民ビデオが非常に積極的に取り上げ

られている印象を受けているんですが、そういった市民ビデオとの間に一種のスワッピングみたいなことが行なわれているなかで、こういった方向性があるとお考えでしょうか。

**津野** 日本とアメリカの違いは、アメリカではLCCという連邦政府の規制があって、電波は公共のものだから公共のために使うという法律があります。パブリックチャンネルがあって、法律で定められていて、市民の誰もが無料で機材を使うことができます。タイムワナーという大きな会社が、営利目的だけの活動ではなくパブリックに返さないといけないという規制のもとにやっていることで、例えば老人問題や健康問題など、人間が持っているあらゆる問題をテーマに作品作りをしています。

**質問E** 収入源とそのパーセンテージを教えてください。あと、作品の提出先はどこでしょうか。

**津野** 収入源は、いまのところ約50%が自分たちのプロダクションから出ております。20~30年前は政府からの補助金が大半だったのですが、いまは政府からの補助金は収入の5%くらいです。自分たちが作っている作品のブロードキャスティング代と配給が大きな部分を占めており、あとはワークショップや個人のファウンデーションからもらうお金が残りを占めています。作品の提出先は、タイムワナーの教育チャンネルHBO、ESPNスポーツチャンネルです。

**質問F** 市民ビデオの“市民”の概念が、発足当時といまとは変わってきていますか。また、女性として、クリエイターとして、モチベーションをどこから得ているのですか。

**津野** その質問は、ひと言では語り尽くせないくらいのテーマですね。一番最初からのスタンスは、“カメラで良いことをしたい”という若い正義感でした。いまは皆さんがカメラを持っていて、観点が多様です。インターネットの普及などもあり、質が大きく変わったということが言えると思います。そして、モチベーションという意味では、ウチの主人(ジョン・アルパート氏)とは『THIRD



AVENUE』を契機にバラバラの活動を始めましたが、彼はニュース性の高いNBCというネットワークのフリーランスのジャーナリストとして12年間仕事をしました。一番最初にNBCで作品を作ったのは、ベトナムの作品の2年後くらい。「ベトナムと中国の国境戦を撮ってきてくれ」ということで行くことになりました。そのとき、娘が2才だったんですが、彼の両親が来て遺言書にサインをさせられたんです。そのときに、初めて親としての責任を自覚しました。子供のために、どちらかが残らなければいけない。だからそれ以降、ジョンが戦場を走り回っているとき、私は行かなくなったのです。

**司会** 津野さん、今日は貴重なお話をいただき、ありがとうございました。会場のみなさん、ありがとうございました。

このレポートは「TVF市民ビデオフォーラム」でのゲストスピーカーの発言を要約したものです。

(市民ビデオ研究会)

●Part 1 TVF作品上映&解説●

そこには市民一人ひとりの「思い」、その時代の「姿」がある

# 「TVF30年の市民ジャーナリズムの軌跡と変遷」

・語りと進行 小林はくどう氏 (ビデオ作家、成安造形大学教授、TVF審査委員)



1980	1990	2000	2008
市民ビデオの幕開け ▼「走れ!江ノ電」 ▼ビデオジャーナリズムの誕生	▼「ダンブ公害〜今、文明の陰で〜」 ▼「と素人集団のテレビ10年史」 ▼「なにかがくるった!〜銀輪公害〜」 ▼ビデオジャーナリズムの一般化	▼「新宿路上TV Vol.31」 ▼「テレビは何を伝えたいか」松本サリン事件のテレビ報道から〜 ▼「高校生が見た沖縄」 ▼「特報 阪神大震災〜半壊マンション理事長の苦悩〜」 ▼「ムラサキウ」物語 ▼「Meeting Ancestor」 ▼「聖域」 ▼ビデオジャーナリズムの躍動	▼「忘れないで」 ▼ビデオジャーナリズムの進展 ▼「Fear no Evil」 ▼「漢字テストのふしぎ」 ▼「レモン」 ▼「Globalization and The Media」 ▼「A Road to Ruin」 ▼「ダムの水は、いらん〜」 ▼「緑の都市軸〜豊田大橋建築の記録〜」 ▼ビデオジャーナリズムの躍動

市民ジャーナリズムの主な動きと上映した作品の位置づけ

私は1972年にビデオアートという形で作品を発表し、活動を始めました。ビデオの即時性、撮ったものをすぐその場で見せることができることのすばらしさは、「百聞は一見にしかず」という言葉どおりです。その後、いろんなところでイベントを展開していったのですが、アーティストだけだとアートの領域になってしまう。普通の一般人が映像をとおして集える場を作れないかと思っていたところ、日本ビクターさんと縁ができて、東京ビデオフェスティバルがスタートしました。

そのTVFも30年を迎えました。寄せられた作品数は約5万本。これらは、当時の暮らしや社会の様子、人々の意見(問題意識)が記録されている貴重なものです。何が貴重なのかというと、私たち一般の市民が自分たちの目線で制作した作品であり、市民ジャーナリズムのビデオ作品がこれだけたくさん集められているのは、たぶんどこにも無いからです。

本日は、短い時間ですが、他では見ることができない時代の証言映像をダイジェストでご覧いただき、市民ジャーナリズムの変遷と広がりを見ていきたいと思います。

## 1970年前半まで

いわゆる大手メディア(マスコミ)が取り上げる社会時事問題=ジャーナリズムという概念の時代でした。

### ★市民ビデオの幕開け(1970年後半から)

ビデオカメラが家庭に入り始めたのを機に、TVFもスタート。国内では、地域からの情報発信や問題提起をする地域ジャーナリズム作品が作られました。また、海外では、個人の思いを表現する個人ジャーナリズム作品が出現してきました。

#### 『走れ!江ノ電』

(1978年・神奈川県川崎市立御幸中学校放送部 神奈川県)

東京ビデオフェスティバルでは、中学生がグランプリをとったことがあります。先ほど司会をしていた佐藤さんが中学生



の頃に、グランプリを授賞し、それがきっかけでビクターに入社しました。この作品は、彼等が江ノ電を取材しているうちに、だんだん江ノ電との距離が縮まり、地域住民と江ノ電との結びつきが見えてきてできあがった作品です。

## ★ビデオジャーナリズムの誕生 (1980年頃から)

ビデオカメラの普及に伴い、風景や行事の記録映像とは違ったビデオジャーナリズム作品が作られ始めました。人々は生活の中にある問題を自分たちの視点で捉え、映像を使って第三者へアピールするようになったのです。

## 『なにかがくるった!～銀輪公害～』

(1983年・川崎市立住吉中学校放送部 神奈川県)

これは、駅前で起きた自転車の違法駐輪を取り上げた作品です。作品の中で、違法駐輪をする人にインタビューすると



「中学生は学校のなかでやっていけばいいんじゃないか」と言われたり、商店街のおやじさんたちからは「電鉄会社に交渉に行け」、また電鉄会社は「市役所の問題だ」と。当事者である誰もが“責任転嫁”するという、身勝手な当時の様子が記録されています。

## 『ど素人集団のテレビ10年史』

(1985年・千葉ガーデンタウン有線テレビ 千葉県)

この作品はガーデンタウンという場所で、ビデオを使って地域のコミュニティを作っていく活動の中でできた作品です。



暴走族がたいへんな問題になっていて、彼等をスタジオに呼んで話を聞くことで、住民の間にあった垣根が取り除かれていきました。

## ★ビデオジャーナリズムの一般化 (1990年頃から)

カメラはデジタルビデオカメラになり、パソコンによる映像編集ができるようになりました。多くの人が、手軽に映像作品を作れるようになり、それに伴い、ビデオジャーナリズムが一般化していくことになりました。

## ビデオリポーターの登場

この頃は、全国の放送局13局と日本ビクターが協力して、ビデオリポータークラブが組織化され、自分の視点で制作した地域のニュースを、放送局で放映していました。これにより、市民ビデオ作品が多くの人々の目に触れることになり、問題解決への足がかりになりました。

## 『緑の都市軸～豊田大橋建築の記録～』

(2000年・豊田ビデオリポータークラブ 愛知県)

豊田市で活動する市民のビデオリポーターが、18年くらい橋を撮り続けた作品です。プロパガンダとジャーナリストとは



何なんだという問題を含んだ内容でした。最終的には中京テレビのビデオリポータークラブという枠のなかで放送。地域放送局のビデオリポータークラブの活躍が見て取れる作品です。

## 地域環境、公害問題への関心

公害や住環境などの問題を始め、南極のオゾンホール拡大をきっかけに、自然環境に対する関心も高くなりました。身近な環境問題を扱った作品も多く寄せられるようになりました。

## 『ダンプ公害～今、文明の陰で～』

(1986年・稲葉正央さん 千葉県)

作者は、千葉県の高校生です。いまの千葉県では、砂利を満載したダンプが排気ガスを撒き散らしながら列をなす風景は見なくなりました。目の前の道路を数珠つなぎで走るダンプカー。生活できる環境ではない町の変化と住民たちの暮らしぶりを、高校生が撮り続けたもので、住環境問題をテーマにした作品です。



## 『聖域』(1994年・赤木仁一さん 鹿児島県)

これは鹿児島県に飛来してくる鶴を、保護鳥として守る側と農作物の害鳥として締め出す側の両方を、一市民の立場から



静かに批判した作品。ビデオカメラを手にした個人が、人間の身勝手な行動によって起きた騒動に一石を投じたルポルタージュで、市民ジャーナリズムのあり方を実感できる内容です。

## 地球・自然環境問題への訴え

## 『MEETING ANCESTORS(先祖に会う)』

(1994年・ブラジル)

アマゾンには言語が違うインディオの部族が500くらいあるそうです。ひとつの部族のリーダーが違う部族に会いに行き、その部族の様子を撮影した記録映像。彼等はこうしたビデオライブラ

リーをたくさん作っています。アマゾンの森林破壊によって、部族の数も減ってきています。“自分の周辺で失われつつあるものを記録に残す”という市民ジャーナリズムが果たしている重要な役割のひとつです。



『ムラサキウニ物語』

(1995年・鈴木一雄さん 宮城県)

海に放流したウニとアワビの顛末を記録した作品で、作者はこの記録の中で人間がもたらしたウニの全滅を静かに告発しています。映像によって突きつけられた環境破壊の事実を目の当たりにして、個人の作品ながらも市民ジャーナリズムの持つ力が感じられます。



『新宿路上TV Vol.3』

(1998年・DROPOUTTV 東京都)

新宿の地下街で生活しているホームレスの路上コミュニティを記録。強制退去や炊き出しの風景、フリーマーケットの様子などをニュース番組風に展開しています。これは、“ただ知らせる”から、“よりインパクトを高める”ことを念頭に置いた内容で、ビデオジャーナリズムの成熟が進んできた表れだと思います。



沖縄基地問題への関心

条約や外交関係という、分からない話で基地問題を取り上げるのではなく、自分たちの理解の範疇で基地問題を考えた等身大のジャーナリズムが見る人の共感を得ています。

『高校生のみた沖縄』

(1997年・ソフト・コム 長野県)

沖縄に、全国から集まった高校生によって開かれた「沖縄全国高校生平和集会」。高校生たちは県知事や米軍基地を訪問。マスメディアの報道のような大局的な見地で語るのではなく、自分たちが感じたこと、見て分かったことで制作したわかりやすいジャーナリズム作品です。



大きな自然災害や事件への関心

大きな事件に関する作品も寄せられますが、マスコミの報道内容とは一線画す作品に仕上げられています。それは、市民ジャーナリズムとして“自分との関係”が作品にあらわれるからです。作品づくりにおいて、物事を考える基準は“自分”なのです。

『特報 阪神大震災～半壊マンション理事長の苦悩～』

(1996年・SSP岩間信生さん 兵庫県)

阪神大震災によって半壊になったマンションの理事長が主役。マンション修復のためにがんばった管理組合の理事長は、色々あってマンションを去っていくという作品です。作者はその後、震災にあった人々を主人公に撮り続け、現在でもインターネットTVで作品を発信し続けています。



『テレビは何を伝えたか』

～松本サリン事件のテレビ報道から～

(1998年・長野県松本美須ヶ丘高校放送部 長野県)

長野県で起きた松本サリン事件のマスコミ報道について迫った作品です。当時の各局の担当者取材して、どうして誤報が生まれたのかを丁寧にインタビュー。報道の現場の実情を公にしました。マスコミでは絶対に作れない市民ジャーナリズム作品のひとつです。



★ビデオジャーナリズムの躍動(2000年前半から)

ブロードバンドが本格化し、インターネット上では動画もストレスなく見られるようになりました。個人で制作したジャーナリズム作品も、手軽に世界に向けて公開できるようになり、見せる場・見られる場が拡大しました。

『ダムの水は、いらん!』

(2002年・佐藤亮一さん 熊本県)

熊本のダムの話です。清流に建設予定のダムの利水・治水について、住民にインタビューしています。水はあるのに、なぜ、新たな整備が必要なのか。あくまでダム建設を進める国の強引なやり方を、白日の下にさらしたジャーナリズム作品。この作品は、裁判の証拠にも採用され、国に対して勝訴を勝ち取りました。



『A Road to Ruin (破壊への道)』

(2002年・イギリス)

森を削ってバイパスを通そうとする。住民たちは木に登って反対運動をしています。



世界を驚愕させた米国同時テロ

『Fear No Evil (災いを恐れるな)』

(2007年・アルゼンチン)

パレスチナとバグダッド、ニューヨークに住むイスラムの16歳の若者3人がアメリカの戦争政策と未来への思いを語ったドキュメンタリーです。



メディアの変化と社会環境の変化

『Globalization and The Media

(グローバル化とメディア)』(2003年・イギリス)

政府のプロパガンダ・マシンと化した巨大メディア・ネットワーク。開かれた公正な報道を模索する人々は、ビデオカメラやインターネットに希望を見出すと言う、報道を鵜呑みにすることへ警鐘を鳴らした作品です。



★ビデオジャーナリズムの進展 (2007年頃から)

インターネットでは動画投稿サイトが賑わいを見せ、ビデオジャーナリズムは、いよいよ量から質の時代へ入ってきました。個人がどんな情報を発信するのか、そして視聴者は膨大な情報から、いかに選りすぐって正しく解釈するというリテラシーの力が求められています。

身近な題材による市民ジャーナリズムの広がり

生活の中で起こる様々な問題を浮き彫りにした個人ジャーナリズム、学校ジャーナリズム作品。時代の変化により、テーマや題材にいまままでに無かったものや時代を反映したものが出現します。

『レモン』

(2006年・松原ルマユリアキズキ 兵庫県)

国籍はブラジルなのに、見た目は日本人。話す言葉も日本語の女の子。日本語よりもポルトガル語が話しやすい家族の中で浮いている気がする。自分は何人、と問いつける自分を撮った作品。自分の中の疑問を、自分の力で解決しようとする自己完結型のジャーナリズムです。



『漢字テストのふしぎ』

(2007年・長野県梓川高等学校放送部 長野県)

漢字テストにおいて、はねやとめなど採点基準のバラツキや考え方の曖昧さを、教師や教育委員会、文部科学省などへインタビュー。満点も先生によっては零点にもなるという矛盾について、高校生たちが調べた作品です。こんなところにもジャーナリズム作品のテーマがあるのかと気付かせてくれます。



『忘れないで』

(2008年・杉並区立東原中学校放送部 東京都)

ハンセン病患者への偏見や差別を訴えた活動に対する反響を綴ったドキュメンタリー作品です。中学生が取材・制作したラジオ番組「人間になりたい」を聞いた人へ取材。ハンセン病に対する誤解が多く、ハンセン病回復者への人格差別が見えてきます。ラジオ番組からスタートして、ビデオ作品にまで発展させたビデオジャーナリズムです。



●Part2 トークフォーラム●



# 「いま、市民ジャーナリズムがおもしろい！」

- ・ ゲストスピーカー 大林宣彦氏 (映画作家)  
佐藤博昭氏 (ビデオ作家・日本工学院専門学校講師)  
羽仁進氏 (映画監督)  
津野敬子氏 (ビデオジャーナリスト、DCTV創設者)
- ・ 司会進行 小林はくどう氏 (ビデオ作家・成安造形大学教授)

## 市民ジャーナリズムにおける スタイルの変遷について

司会 まず、「市民ジャーナリズムとは何か」について考えてみようと思います。第1部の講演で、津野さんが彼女自身の生き方やDCTV創設による人材育成などの展開が、大いに参考になるのではないかと思います。



佐藤 僕は学生時代からDCTVの作品を見る機会がありまして、英語版でしたが80タイトルぐらい見させていただきました。DCTVの変遷をたどっていくと「市民ジャーナリズムとは何か」というテーマが、発展しながら継続されていることを強く感じます。教科書のような存在と言えますね。特筆すべきは、活動があって、記録することで、力が増して行って、それが次の活動の動機になっていく点です。常にアクティビズムとジャーナリズムが並走している、それがずっと維持されているのが凄いなと思います。津野さんに質問があるんですが、「活動」「記録」

「発表」という循環のなかで、津野さんたちの活動はだんだんスタイルを変えていかれたと思うんです。で、『THIRD AVENUE～(サード・アベニュー～)』(TVF1981・津野敬子&J.アルパート ビデオ大賞)では、ナレーションを極力排していくというスタイルをとられていて、そのかわりアルパートさんがファインダー越しに「アレは何だ」と指をさして聞いていくようなスタイルでやっている。これは突撃リポートのようなスタイルにも見えます。また、近年、TVFに送られてくる作品では、徹底的に寡黙だったりしています。そういうスタイルの変遷について、お話を伺えると嬉しいのですが。



津野 1980年代のスタイルは、ジョン自身非常にアグレッシブに、画面のなかで指をさして「これ何、あれ何」とやっています。いまの彼はそれを見て恥ずかしくなっていますね。「なんてイヤな男だ、俺は」って。現在の寡黙なスタイルは、彼がアメリカ軍に従軍して、中東のバグダッドで負傷した兵士たちが担

ぎ込まれる『Baghdad ER (バグダット緊急救命室)』(TVF2007 佳作)の取材あたりからでした。ジョンは絶対的に反戦の人なのですが、そうした個人のメッセージは言わずに、戦争の現実、若い兵士が負傷して、必死になって助けようとしているドクターがいる事実だけを見せています。彼はその現実を写し出すだけで充分だと思ったんです。私は、彼自身がそこに達したことに非常に感銘を受けています。



**大林** あの世界『THIRD AVENUE』には事件性やスキャンダル性はなかった。でも、ご夫婦の言葉のひとつひとつに耳を傾けることで、それを超えた人間的な、先に進める可能性や温もりを感じることができました。そこが“東京ビデオフェスティバル”なのではないでしょうか。

### 市民ジャーナリズムの題材について

**司会** 大林さんにお聞きしたいんですが、先ほどの津野さんの講演の質疑応答で「どうやって題材を見つけるのか」という質問がありましたが、大林さんは、いかがでしょう。

**大林** 僕も、いちばん後ろの席で津野さんのお話を伺っていたんですが、その質問を聞いて、正直、突き上げられるようなショックを受けたんです。ネタを探さないと、作品って撮れないものなのかな。そうじゃなくて、向こうから来た人と挨拶し



てるとモノができるんじゃないかな。僕がつくる劇映画は「こしらえもの」ですが、いまの時代にはジャーナリストの感覚を持っていないと劇映画はできない。同時に、ドキュメンタリーは、劇映画の感覚を持っていないと撮れないということも言えるんですね。

昔は、ジャーナリストになったときに何を報道するかということがよく議論された。当時よく言われたのは「犬が人間を噛んでもニュースにはならないが、人間が犬を噛んだらニュースになる」ということ。確かに犬が人間を噛むようなあたりまえのことを伝えてもしょうがなかった。でも、現代ではメディアの数も種類も多様化してきているのに、プロの報道機関はいまだに「人間が犬を噛んだ」ようなニュースばかり報道をしています。そうした報道を見てると日本中、そして世界中がおかしくなったとしか思えない。今の時代、テレビもラジオもビデオも全部無くしたほうが、人間がマトモになるんじゃないかと思わざるを得ない。報道というものが不幸な状態になっていますね。特にプロの報道は。



そこへいくと、市民ビデオと呼ばれる作品がすばらしいのは、「犬が人間噛んじゃうことだって、向こう三軒両隣にとっては大事件ですよ」という、本来の大事件が描かれることによって、とても人間らしいやすらぎが得られることだろうと思います。

### ジャーナリズムと市民ビデオの関係について

**羽仁** ネタを探すという感覚のジャーナリズムはダメだと思っんです。そうじゃなくて、ネタの後ろに何があるかということ責任を持って見る、そして、それを見たのは私ですと分かるような見方をしていけないと。だから僕は「漢字テストのふしぎ」から新市民ビデオジャーナリズムが始まったと思っています。僕は、従来のジャーナリズムにはとても大きな欠点があるとかねがね思っていました。こ



れは一般ジャーナリズムだけではなく、市民ジャーナリズムにも言えることです。それはつまり「エゴイズムというものを正當に扱っていない」ということ。

松本サリン事件を扱った作品『テレビは何を伝えたか～松本サリン事件のテレビ報道から～』（TVF1998・長野県梓川高校放送部 日本ビクター大賞受賞）は非常によく撮っていますが、最後のところでは警察や新聞社が悪いというところで終わっている。それは従来のジャーナリズムがとってきた態度と、結局、同じなんです。市民ビデオが同じことをしたら本当につまらないと思う。市民ビデオの素晴らしいところは、いつでも1人の人間の視点でしかモノを見つめるということじゃないかと思うんです。良い悪いということではなく、ビデオを撮るという行為をとおして、市民が市民でありながら、無反省な市民ではなく、見直そうという姿勢を持つことが大切なんだと思います。一方、『漢字テストのふしぎ』（TVF2008・長野県梓川高校放送部 ビデオ大賞）を見て、まず感じるのは、登場する学校の先生たちが「これほどまでにエゴイストか」ということです。でも、作品ではそうしたエゴイスト一人ひとりを優しく撮っているんです。登場した先生がエゴイストだとしても、撮る側、インタビュアーは、「いい人」に変えるくらい極めて上手につくってある素晴らしい作品です。

**大林** 『テレビは何を伝えたか～松本サリン事件のテレビ報道から～』は、被害者なのに犯人にされた方がいて、長野の高校生たちが彼を犯人に仕立てたマスコミを取材している。でも、その高校生たちの作品ですら、最後にマスコミの大人たちを糾弾してまとめたことを、羽仁

さんは指摘しているわけです。あなたたちだって同じ人間であることを考えないといけないと。羽仁さんの言うとおりの「みんなエゴイスト」なんです。エゴイズムとエゴイズムがお互いの違いを理解することによって、何か生まれえないかということがこれからの時代なのだと思います。マスコミというものは客観的であると言われてきたが、客観というのは欺瞞がある。「ナンバーワン」ですよ。誰がいちばん正しいか。ところが普遍性というのは「オンリーワン」なんです。みんな個であり、違う個がどれだけ他人の心に寄れるかということなんです。

### 戦争と市民ビデオの関係について

**大林** 津野さんに昔から聞いたかったことがあったんですが、2001年9月11日に大変なことがありました。あのときにジョン・アルパートさんが応募してきたのは、お父さんのことを描いた作品『PaPa』（TVF2003・J.アルパート 優秀賞）で、とても印象に残っています。アメリカにいた当事者が、あの時期に、あの事件のことではなく、あえて父親をテーマにした作品を作った。それこそが、9.11に対するアメリカ市民の心を象徴しているような気がします。素晴らしいなと思いました。

**津野** (ジョンの) “パパ” は彼のヒーローだったんです。ビジネスマンとしては成功しなかったが、ジョンの尊敬の対象でした。

そのパパが病に冒されて数年の命というとき、フィルムメーカーとして父親の姿を遺したいと思ったんです。でも、プロとして作るなら、きれいごとで終わらせることはできない。そこで、パパの父親が自殺した事実を描くことにした。そしたら伯母さんがとても怒った。このできごとで、家族にカメラを向けることは本当に難しいことだと思いました。

でもジョンには、カメラを自分に向けて写すことで、いままで他人に対してカメラを向けてきた行為を償いたいという思いがあったようです。

**大林** いまのその言葉を奥さんである津野さんから聞いたことはとても嬉しい。あの事件があったら、普通はカメラを敵に向けますよ。自分たちの聖域が傷つけられたわけですから。でも、ジョンは表現

者として自分にカメラを向けた。それこそが市民ジャーナリズムの良心だと思います。

羽仁 2年くらい前に大賞をとった作品『Off To War: Chapter Two』（TVF2005・Brent & Craig Renaud 日本ビクター大賞）の作者も、DCTVから出た人



ですよね。アメリカの州兵が戦争に行くことは、州兵本来の目的とは全然違って、それでも州兵は家族のためにお金をもらって戦地に行くわけです。ただ戦争しちゃだめだと

言うのではなく、アメリカの経済の問題も抱えている。行きたくなくても貧しいから、お金がもらえるから行くしかない。そこの歪み。そうしたことを市民ビデオは捉えていくべきだと思います。

佐藤 ぼくはDCTVやアルパートさんが築き上げた手法は、正しいと思います。状況を並べていくことですべてが分かる。言いたいことが伝わってきます。ただ、いまの情報社会は情報のリテラシーに欠けているところがあって、どう解釈するかが見る側にゆだねられるところがあるんです。だから“反戦”というテーマを描くときに、「反戦」と言葉で言わないと、良い作品であっても逆の意味のプロパガンダとなる可能性があると思います。

イラク戦争において、あんなに若者が死んでいってしまう状況のなか、「いますぐ戦争をやめる」という選択肢だけでなく、「大規模にやって早く終わらせよう」という意見もある。でも「そうじゃないんだ」というメッセージを見る側にゆだねることについて、“これでいいのだろうか”と思えるんです。実際、戦争を支持する人のなかにも、あの作品『Baghdad ER（バグダット緊急救命室）』を評価している人がいると聞いています。それを作者がどこまでコントロールしたらいいのか、ゆだねるべきなのか……。



津野 あの作品が表現したのは、“戦争というのはどういうものか”ということです。戦争をしたい人はするものです。でも、情報も無いまま、何もわからないまま戦争を支援するのはとても危険です。だから私たちは作品を作る。ジャッジは見る人に任せます。

以前は私たちも「戦争は悪い」と声高に言っていました。でも、いまは、みんなが見ていない事実を提示して「それでも戦争したいですか」と問われているんです。

大林 市民ビデオということをひとことという、一生懸命生きている人がたまたまビデオを持って撮る作品だと思います。

いま、世の中は「平和、平和」というけど、いちばん平和なのは敵を殺すこと。戦争反対という言葉は無力な時代なんです。でも、本当の平和は戦争をしないことですよね。あなたが拳銃を向けても、私は拳銃を向けません。その覚悟ができるかどうか。だから津野さんが言うように、戦争反対と声高く言うだけが戦争反対ではないと思う。自分が親として人間として、どういう選択をするか。それを考えるのが市民であって、そのために作品として役立つのが市民ビデオだと思うんです。

## 市民ビデオの意味について

司会 では、ちょっと会場の皆さんに、市民ビデオジャーナリズムの考えが知りたいと思います。

質問G 大学院でメディアを研究しているものですが、秋葉原の通り魔事件の犯人が“メディアに一気に訴えてワイドショーを独占したい”みたいなことを

言っていました。いまの閉塞した生活を送っている人が、ビデオを通して他の人とのつながりを持つ可能性を、今日の話聞いていて感じました。そういうヒューマニズムにつながるビデオの可能性について、もう少し話を伺いたいのですが。

**津野** テレビを見ていて、若い人の閉塞感がギリギリのところに来ているのは感じます。商業主義がここまで行き過ぎていると、視聴率をとるために何でもする。そんな状況のなかで、若者の心は行き場がなくなってしまい、人間から思考力を奪い取ってしまう。私自身も非常に危機感を感じます。同じように、そういう状況に危機感を感じる若い世代は、これからのメディアを立て直すために大事な人たちで、その目を持ち続けていただきたいと思います。



**大林** 子どものころに見た映画のなかで、「人はひとりでは生きてはいけない。2人になると傷つけ合う。そして許し合う。そして愛が芽生える」という内容のものがあった。その映画がどういう映画だったか思い出せなくて、ある週刊誌の誌面で問うたところ、「そんな馬鹿なこと考えているからお前の映画はつまらないんだ」という投書がきました。この話を早稲田大学の講演で学生にぶつけてみたことがありました。オレは本当に甘いのか。そうしたらある学生が「大林さんは人に期待しすぎる。もっと人と関わらないほうが、あなた自身も傷つかないでしょう」と言われた。普通の生活ならそれでいいでしょう。でも俺は表現者だから、人と関わらざるを得ない。関われば傷つけ合い、許し合い、愛が芽生えるところまでいこうと考えている。ヒューマニズムをたぐり寄せることもできるかもしれない。そんな話をしました。そしたらその講演の後、「いままで嫌いで口をきいたことがないコイツと、これから話をしてみようと思うんです」というグループがいっぱいできた。若者たちはいいなど、僕は素直にそう思いました。僕たち大人は、いままで若者にそういうチャンスを与えていなかったのではないのでしょうか。ひとりであれば、傷つけ合うこともなければ、許し合

うこともない。だから秋葉原の事件がおきる。いま、僕らが手にしている表現や、マスコミやいろんところで溢れている情報は、ひとつひとつが凶器になる可能性を持っています。市民ビデオはそうではない、許し合うことで生まれるものがあるのではないか。そういうビデオを、僕たち大人は作っていかないといけないと思うんです。

**質問H** 私は、ジョン・アルパートさんのステイトで、サンダンスで受賞したビデオをプロデュースした人間の母親なんですが、娘がどうしてアルパートさんと出会ったのか、ここで紹介させてください。娘は大学を卒業して大学院に行っていました。そこで、アルパートさんの作品に出会ったそうです。卒業後、NHKのワシントンDC支局に研修生として行っていました。自分がやりたいこととは違うなと感じたそうです。そんなとき、アルパートさんのことが鮮明に思い出されて、インタビューを申し出たそうです。アルパートさんは娘の話をちゃんと聞いてくれた。それがきっかけでNHKを辞めてアルパートさんのところに行き勉強し、いまはニューヨークでマイノリティの人たちに教える仕事をしています。その子たちと一緒に作ったビデオがサンダンスで賞をもらうことができました。私もその上映会に行きましたが、質疑応答のときに、生徒が「自分たちはこのビデオを作るまで、マイノリティだからどうせ自分は何もできないだろうと思っていた。でもこうして賞をいただきました。これから頑張っていきたい」と言ったんです。会場内は大きな拍手に包まれました。これからいろいろ考えておられる方は、どうして



もやりたいと感じたら、ぜひ勇気を持ってやっていただきたいと思います。

**質問1** フリーライターをやっている者です。

バグダッドの作品でメッセージが誤解されないかということは、例えば日本でも最近、映画『ヤスクニ』が反日的だとかいろいろ紛糾しました。やはり日本では、メッセージとしてただ投げかけるのではダメだと思うんです。ジャーナリズムとして商品として出される番組は完結しなければいけない。

津野さんにお伺いしたいのですが、今後、プロのジャーナリズム、マスメディアの役割はどうなっていくのでしょうか。

**津野** マスメディアが今後どうなるか、私には正直分からないのですが、普通では聞けない、見れない、大事なテーマなのに誰も触れないものを地域の人たちが撮っていくというのを、私たちは続けていくと思います。

**佐藤** 商業チャンネルがどこに行くかというのは、誰がお金や情報をつくっているかという問題もあります。無料で得られる情報もあれば、お金を払うと詳しい情報が得られる場合もある。そういうところに投資する人も出てくるかもしれません。でも、いずれにせよマスメディアという商業チャンネルはあり続けると思います。

**大林** 僕にもプロのジャーナリストの友人がたくさんいますが、「あんたたちにとって悪いニュースがない日は悪い日だろう」という話をしたことがある。そういうときに「今日はニュースが何もありません」とカメラを屋上に向けて青空を撮り続けているようなことはありえないだろうか、と。テレビも情報も、僕たちの幸せを願って生まれたものが、どうやったらスポンサーが金を出さずとか、ビジネスでしか成立しなくなってしまった。そのなかで真実のジャーナリズムを迫るのは難しいことだと思いますが、誰かがいつか、やってくれたらすごいことになるだろうなと思っています。願っています。

**司会** いま、日本の放送あるいはジャーナリズムは「検証する」ということがないまま、野放しになっている。情報を送りっぱなしで、キャッチボールのように戻ってこない。それがメディア社会のストレスになっている気がします。マスメディアでは登場しにくいことや、その当事者でしかわからないことを自分のビデオカメラで撮って発信していく。見た人の反応があり、そこからコミュニケーションやリテラシーが生まれてくる。そんな市民社会が広がっていくことが大切なのかな、と思っています。



本日は皆様、どうもありがとうございました。

(全体終了、閉会)

このレポートは「TVF市民ビデオフォーラム」での  
ゲストスピーカーの発言を要約したものです。  
(市民ビデオ研究会)